

# 会報 比較家族史 38

事務局 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7 弘文堂気付  
郵便振替(会費) 00130-4-25222 (年報バックナンバー・その他) 00180-3-604964

## 比較家族史学会 第四一回研究大会

日時 二〇〇二年五月二十五日(土)・二十六日(日)  
場所 あえりあ遠野(遠野市民センター)

岩手県遠野市新町一番一〇号  
(遠野市立博物館西向い)

TEL 0198-60-1700

(別紙会場案内参照)

テーマ 遠野・民俗・東北の家族/生命技術と家族

■ 一日目(五月二十五日) 午前九時～

(午前八時三〇分 受付開始)

◆ 会長挨拶

鎌田 浩

共催者挨拶

遠野市長(教育委員長)

◆ 小シンポジウム「遠野・民俗・東北の家族」(パート1)

・岩本由輝(司会)

「趣旨説明」

・大野 啓

「岩手県北部における同族関係の変容」

九時二〇分～一〇時一〇分

・牧田 勲

「奥州白石女敵討」とその社会的変容

一〇時一〇分～一一時

◇ 総会(一一時～一二時)

昼食(一二時～一時)

◆ 小シンポジウム「生命技術と家族」

・森 謙二(司会)

「趣旨説明」

・上杉富之

「現代生殖技術への人類学からの対応」

一時一〇分～一時三五分

・家永 登

「法律学から見た生殖技術の問題」

一時三五分～二時

・太田素子

「歴史学から見た生命倫理の問題」

二時～二時二五分

(コーヒー・ブレイク)

コメント

二時四〇分～四時 各一〇分

石井美智子(法学)、三成美保(西洋法制史)、柘植あ

づみ(医療人類学)、新村拓(日本史)、鈴木七美(社

会人類学)、藤井正雄(宗教学)。

討論

四時～五時

□ 懇親会

■ 二日目(五月二十六日) 午前九時～

小シンポジウム

「遠野・民俗・東北の家族」(パート2)

・岩本由輝、長谷部弘(司会)

・佐藤誠輔

「『遠野物語』の背景としての家族」

九時～九時五〇分

・岩本由輝

「山人と贋銭製造」

九時五〇分～一〇時四〇分

討論

一〇時四〇分～一二時

閉会

一二時

## 小シンポジウム趣旨説明

### (1) 生殖技術と家族

「近代」の動揺が始まる頃から「家族とは何か」という問いが立てられ、「婚姻」や「家族」の定義に対しても疑問が投げかけられるようになった。マードックの核家族論は「夫婦と未婚の子ども」を普遍的な核となる「家族」としたのである。「家族」概念に対する疑問はこの「核家族」の普遍性に対する疑問とともに始まったとも言える。「夫婦と未婚の子ども」を単位とする限り、「夫婦」あるいはその前提としての「婚姻」の定義が問われることになるし、マードックが予定した家族機能をもたない家族も「定義」を満たさないものとして取り上げられた。幽霊婚（死者同士の結婚）や同性の結婚（女性同士の結婚）はその代表例として取り上げられたし、キブツ社会のように子どもの養育を共同体に移譲した「夫婦」も「家族」概念から遠ざけられることになった。このようなマードックの核家族論への批判を通じて、夫婦や親子という関係が必ずしも生物学的な基盤に基づくものではなく、これらの関係がきわめてフィクショナルなものであることが明らかになってきたし、家族機能も対社会との関係において相対的に変化するものであることが次第に明らかになってきた。

マードックの核家族論はいわば「近代家族」

に適合的であった。つまり、近代家族のなかでマードックの夫婦と血縁に基づいた親子関係が強調されたのである。キージングはマードックが陥った問題を注意深く避け、家族の出発点を母子関係に安定した配偶関係の形成においた。女性は自分が出産した子どもは誰が父親であろうとすべて自分の子どもであり、出産をしたという事実が母子関係を決定した。その意味では、家族のなかでもリアリティのある事実＝生物学的事実から出発をして、多様なフィクショナルな関係を位置づけていった。もちろん、母子関係一般が常に生物学的なものというのではない。妻が産んだ子どもが正妻の子どもとして位置づけられることもあり、母子関係もフィクショナルな関係であることに違いはない。しかし、出産という事実の規定された母子関係が揺らぐことはなかった。近代家族は、この生物学的な事実を土台にして、親子関係全体を生物学的な血縁関係であることを理想として要求し、夫婦と親子関係の愛情に基づく親密な関係を家族概念の中核に据えたのである。

マードックの核家族論に対する批判は、この近代家族の揺らぎに対応するものであった。婚姻外の性関係の増加は正当性をもつ「性」パートナーとしての夫婦関係を脅かしているし、同性愛の容認は生物学的な関係としての男女関係としての夫婦関係を脅かし、特にアメリカ社会に見られるように、離婚に伴う再婚の増加は生物学的な親子関係を脅かすことになった。近代家

族の「揺らぎ」は、一方ではジェンダー論の観点から指摘されたように男性による女性の支配という構造の崩壊とともに、他方では夫婦と親子関係の愛情に基づく親密な関係という生物学的な関係に基づいた近代家族に特有な構造の揺らぎにも対応していた。

しかし、生殖技術の展開による新たな問題は、近代家族の「揺らぎ」の問題をはるかに超えて、新たな問題を家族に提示してきた。生殖技術の展開は、もともとは不妊治療として展開したものであろう。子どもが欲しくても子どもを産むことができない女性たちの切実な希望は、人工授精という新しい技術の開発を求め、その需要をつくりだしてきた。先進諸国のなかで例外なく進行する少子化が「産婦人科」の需要を減少させてきたが、この人工授精技術の展開は新たな「産婦人科」市場を形成するものであった。

この人工授精が、母子関係であれ父子関係であれ、生物学的な親子関係を逸脱しない限りは、これを通常の治療行為と見なすことができた。しかし、その治療行為が生物学的な関係を逸脱するようになったとき、近代的な（言い換えるならば生物学的関係を土台にした）親子関係を規定した家族法に動揺がおこった。父子関係の確定や相続法上の問題は「近代家族法」の枠組みでは処理ができなくなってきたのである。もっとも、他の女性の卵子を自己に移植する場合でも、出産による母子関係を否定するものではない限り、「家族」概念に多少の「揺らぎ」が生じた

にしてもなお「家族」は安泰であった。つまり、母子関係は出産という事実によって確定されているからである。大きな変化は、「代理母」のように、出産という事実による母子関係が否定されたときに現れることになる。親子関係が、生物学的な関係によっても、出産という事実によっても確認することができないからである。そして、クローン技術による新たな「生命」の創造は、根本的に夫婦や親子関係を中心とした「家族」概念を壊していくことになるだろう。

生殖をめぐる当面の私たちの課題(小シンポの課題)は、「家族」概念の揺らぎのなかで何がおこり、おころうとしているのかという問題(法律学・社会学・人類学の分野を中心として)、伝統的に「生命」をどのように考えてきたか、いわば生命観や生命倫理に焦点を当てて、問題の所在を明確にすることから始めたい。

(森 謙二)

(2) 「遠野・民俗・東北の家族」

『遠野物語』を生み出した地域における家族のあり方、その話が日常的に語られる場における家族のあり方、さらに、それを伝承する家族のあり方を遠野に生まれ育った方々に話していただきながら、遠野の民俗、さらには東北の家族を考えていくことにしたい。(岩本由輝)

運営委員 岩本由輝(委員長)、森謙二、国方敬司、長谷部弘、家永登

■事務局からの連絡

1 会費納入のお願い

未納分の有無に関わらず、全員に振込用紙を同封しております。封筒住所ラベルの下に既納年度が記載されております。年会費は、個人会員は三〇〇〇円、賛助会員は五万円です。なお封筒の住所ラベルに記載された数字は平成一四年三月三十一日現在のものです。同日以降の振込みおよび行き違いの節はご容赦ください。

2 『シリーズ比較家族』の購入について

早稲田大学出版部より『シリーズ比較家族・介護と家族』が刊行されました。購入希望の方は、同出版部まで直接お問い合わせください。なおシリーズ各巻の刊行状況は、二月に発行した「お知らせ」に同封しました。このシリーズは本学会監修でもあり、近時売上数が芳しくないことなどから、会員の所属各大学図書館での購入等の販売上の協力がなければ、刊行の継続が危うくなることもありえます。ご協力のほど、お願いいたします。公費等での購入も、直接早稲田大学出版部にご連絡ください。

連絡先 早稲田大学出版部  
電話 〇三三三二〇三二一五五  
FAX 〇三三三二〇七〇四〇六

3 『比較家族史研究』のバックナンバーについて

創刊号以外については、まだ若干の在庫があります。購入希望の方は、学会事務局宛てご連絡下さい。比較家族史研究は会員には一冊無料で配布しておりますが、バックナンバーおよび新刊を二冊以上購入の場合は有料(二割引き)となります。非会員も同様です。

4 理事改選に伴う事務局体制の変更

昨年末に行われました理事選挙に伴い、新事務局体制が次のように決定しました。

会長 長・鎌田浩(元専修大)  
副会長 岩本由輝(東北学院大) 成能民江(お茶の水大)

事務局長 高木侃(専修大)・家永登(同)  
事務局連絡先 TEL 03-3265-1937 4 (直通)

FAX 03-3265-16297  
〒101-8385 東京都千代田区神田神保町

三の八 専修大学法学部 高木侃研究室気付  
比較家族史学会事務局

(電話の場合は第一・第三火曜日午後一時～五時)  
TEL 03-3265-1937 4 (直通)

FAX 03-3265-16297  
自宅FAX

5 『事典家族』の購入について

本学会の一〇周年事業として刊行されました『事典家族』は、会員は定価(一〇,〇〇〇円)

の二割引で購入できます。購入希望者は本学会の会員であることを伝えて、直接弘文堂まで申込んでください。

申込み先

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台一―七

弘文堂編集部 浦辻雄次郎様

電話 〇三―三三九四・七〇〇三

FAX 〇三―三三九四・七〇三三

理事会議事録

日時 二〇〇一年二月二日

場所 専修大学

出席者数(委任状を含む) 三九名。

1 理事選挙および新体制について

当選辞退者の取り扱い。会長・副会長選挙(前述事務局からのお知らせ欄参照)。

新理事会体制役割決定。事務局(前述事務局からのお知らせ欄参照)。編集事務局(八木透・白石玲子・牧田勲・三成美保・二宮周平)企画(森謙二・戒能民江・事務局)渉外(奥山恭子、山田昌弘)

2 学会開催頻度について

企画委員会を中心に継続して検討

3 学術会議関連

「ノーベル賞100年記念シンポジウム」後援、および「基礎法学のあり方シンポジウム」後援を了承。

4 新入会員の承認

四氏が入会を承認された(別項参照)。

5 次回研究大会の準備状況

二〇〇二年五月二五・二六両日、岩手県遠野市民センターにて、岩本由輝会員を中心として開催。遠野市との共催に決定。企画等準備中(岩本会員報告)。

6 『比較家族史研究』の編集について。

年度内刊行を目指し、最終校正の段階である旨、編集委員長より報告。編集委員長より、納本について問題提起があり、事務局が対応することに決定。

7 二〇周年特別大会報告の出版について

明治学会大会は、日本経済評論社から、二〇〇二年中に出版予定。ソウル大会については、早稲田大学出版部により出版の予定。

8 次々回以降の大会開催予定

本年秋は、群馬県緑切寺満徳寺資料館において、同資料館と共催で実施することに決定。二〇〇三年春大会候補として、沖縄での開催を検討。

9 『シリーズ比較家族』について

「介護と家族」編者より、刊行の報告と、編集時の問題点報告。  
九州大学での大会テーマ「移動と家族」につき、同大会運営委員長の伊藤昌司会員より出版を促進する旨の発言があった。

新入会員

佐藤睦朗(神奈川大学・西洋経済史)、山田香子(長崎県立・文化人類学)、荻野美穂(大阪大・女性史)、首藤若葉(山形大・労使関係論)、林光江(北京大博士課程・文化人類学)

住所・所属等の変更(会報三七号掲載以降)

現在学会名簿の作成準備中であり、五月大会までには発送予定です。住所・所属等の変更の記載は、新名簿に代えます。

会員著作(単行本)(事務局に連絡のあったもの)

大藤修『近世の村と生活文化』吉川弘文館、二〇〇一年、九五〇〇円

上杉妙子『位牌分け』――長野県佐久地方における祖先祭祀の変動』第一書房、二〇〇一年、八〇〇〇円。

戒能民江編『ドメスティック・バイオレンス防止法』尚学社、二〇〇一年、三〇〇〇円。

芝絃子『スペインの社会・家族・心性――中世盛期に源をもとめて』ミネルヴァ書房、四〇〇〇円。

西村汎子『古代中世の家族と女性』吉川弘文館、二〇〇二年、九五〇〇円